

チェコの議会選（622号）

2025年 10月 石館

中欧チェコで10月3-4日、下院選（定数200）が実施された。バビシュ前首相の率いる最大野党のポピュリズム政党“ANO2011”が勝利し、第一党となった。単独過半数には届かず極右勢力などと連立交渉を始める。



EU懐疑派が政権を握る可能性が高まり、ウクライナ支援に向けた欧州の足並みが乱れかねない。

ANOは得票率が35%をわずかに下回り、定数200の下院で80議席を獲得。2021年の前回選挙の72議席から増やしている。現職のフィアラ首相が率いる右派連合（SPOU）は52議席で

2位だった。

2017-21に首相を務めたバビシュ氏は、新たな連立政権の樹立に向けた協議を主導するよう、大統領から要請される見通しだ。バビシュ氏は、プラハ郊外にあるANO本部で、歓声を上げる支持者らに対し、“これは歴史的な成功だ”と述べた。

今回の選挙結果に大きな驚きはなく、ANOが首位に立つことに疑いの余地は殆どなかった。バビシュ氏は既に、反グリーン・ディール政策を掲げる“モトリスト”や、反移民を訴える日本人実業家トミオ・オカムラ氏が率いる政党“自由と直接民主主義（SPD）”と協議を開始している。どちらもEU懐疑派の右派少数政党で、今回の選挙では得票率5%を超えた。（5%を超えないと議席を得られない）

ANOが議会で過半数を有する連立政権を樹立するには、両党との連携が必要となる。他の政党がバビシュ氏との協力に応じる可能性は低いと見られている

ANOと最も共通点のある政党は“モトリスト”だ。両党は既に、欧州議会で“主権重視”会派“欧州の愛国者”に所属している。同会派は昨年、ハンガリーのオルバン首相やオーストリア議会の第一党である極右・自由党のキクル党首と設立した。

ANOは、EUの排出目標に対するモトリストの懸念を共有しており、これらの目標を修正または全面的に拒否する方針を掲げている。両党は、よりクリーンなエネルギーのために、チェコの各家庭がより大きな経済的負担を負うことに断固として反対している。



チェコ・プラハで街歩き！ 歴代王の気分で旧市街からモルダウ川...

プラハの中心を流れるモルダウ川
手前はカレルの橋、右奥に見える城はプラハ城

ウクライナの戦争努力に対するチェコの軍事支援は、バビシュ政権の下で大きく変化する可能性が高い。バビシュ氏はすでに、ウクライナに対する弾薬供与イニシアチブを廃止することを公約している。

このイニシアチブは、ロシアがウクライナに全面侵攻を開始した2022年以降、ウクライナに350万発の砲弾を供給してきた実績がある。



支持者に手を挙げるバビシュ氏

イニシアチブでは、チェコの武器ディーラーが国際的な人脈を活用し、ウクライナ向けの砲弾を世界市場から調達している。その資金の大部分は、EUとNATOのパートナー諸国から拠出されている。

一部の製造業者はロシアとの関係を持つ国に所在しているが、取引はチェコの業者を通じて行われるため、そうした関与は非公開のままとなっている。バビシ

ユ氏は、この計画をNATOの枠組みに移管すべきと主張しており、チェコの武器ディーラーがこの計画から巨額の利益を得ていると非難した。

また、自身の政権下でチェコがEU及びNATOの信頼できるパートナーではなくなるのではないかという西側の懸念を一蹴し、自分が極端な政党から距離を置いているように見えるのは、そうした懸念が不要なことの表れとだとした。



チェスキー・クルムロフ

チェコの中で最も美しい街と言われるチェスキー・クルムロフ。

小生も南ドイツから首都プラハに車で向かう途中この街を通った。丘の上に立ちこの街を一望したが息をのむほどの美しさだった。

チェコスロバキアは1918年に独立したが、1989年ベルリンの壁の崩壊で、ソ連邦から離脱、民主化が

実現したが、1992年にチェコとスロバキアの分離を議会で議決し、1993年1月を期して全く別な国として再出発をすることとなった。チェコの首都プラハは先進的な都市であるが、スロバキアの現在の首都ブラチスラバは田舎の街といった感じでプラハとは全く違う。

以前にもレジメで書いたことがあるが、スロバキアのフィッツォ首相は親EU、EU懐疑派で、ウクライナ支援も消極的である。チェコのフィアラ現政権は親EUでウクライナ支援も積極的であったが、今回の選挙で第2党に転落、かつて同じ国であったチェコとスロバキアは両国ともEU懐疑派になり、何らかの形で連携するようになる可能性がある。

ただANOはロシアに批判的であるが、SPDなど極右政党はロシアに融和的な姿勢を取る。極右勢力はEUやNATOからの離脱を問う国民投票の実施を求めており、連立協議の行方次第でロシアの影響力が強まる懸念もある。

ANOを軸とする政権が成立すれば、フィアラ現政権の進めた親EU路線からの転換は避けられない。対中国関係については、バビシュ氏が首相を務めた

2017-21年、就任当初に中国からの投資や貿易拡大をにらみ。経済関係の強化を掲げた。また“一帯一路”にも前向きな発言をしていた。ただ中国の通信機器大手、ファーウェイの製品が中国のスパイ活動に使われるとの警戒感が広がり、中国と距離を置く姿勢に転じた。また中国からの投資が当初の想定を下回ったことも背景にあるとされる。

ANOのバビシュ党首は、中国との関係について、“EUとNATOの同盟国と歩調をそろえる”と発言した。現在のフィアラ政権下で中国との関係は冷え込んでいる。チェコは台湾との外交関係を強化し、24年6月に台北に“チェコセンター”を開設すると決めた。今後ANOのバビシュ党首がどのような連立を組み、対中政策をやるかは今のところ明確ではないが、前言にもあるようにEUと歩調をそろえることを期待している。

P. S. 以前にもレジメに書いたことがあるが、今から57年前、1968年4月チェコスロバキアで共産党が改革派のドブチェクを登用して民主化に乗り出した。この民主化運動がソ連邦の他の国に波及することを恐れ、当時のソ連のブレジネフ政権は、8月20日ワルシャワ条約機構5カ国軍を侵攻させて軍事弾圧に踏み切った。市民の抗議の嵐の中をプラハの中心部を制圧、ドブチェクらを連行した。

小生はこの時チェコに偶然入っており、国境が閉鎖されたので国境外に出られなくなったことがある。1968年春の一連の自由化の爆発を“プラハの春”と言っているが、このチェコ事件でプラハの春は踏みにじられてしまった。それ以来チェコスロバキアは1989年のベルリンの壁崩壊まで民主化はされなかった。